

台湾における日本語教育理論の確立にむけて⁽¹⁾

中川 仁

歴史, エスニック・グループ, 多言語社会, 言語環境, 語族別日本語教育, 地域別日本語教育

ここでいう台湾における日本語教育の理論の確立とは、言語帝国主義⁽²⁾の国語及び同化政策とは別の外国語教育としての日本語教育の実践を意味するものである。台湾は二つの外圧による、統治を受けている。一つは日本による統治政策であり、もう一つは国民党政権の台湾移転による政策である。これらの国家を建設するためには、一つの国民・一つの民族・一つの言語が理想的とされ、多言語社会共存から単一言語社会への移行と位置づけられるものである。つまり日本語教育の展開と国語教育⁽³⁾の展開であり、言葉の超民族的機能⁽⁴⁾の国語化ということなのである。

このような歴史的体験を背景にせおいながら、台湾は戦後、外国語教育としての日本語教育に取り組んでいったのである。ここでは台湾における日本語教育、戦後の台湾が国民党政権に接收されてからの外国語教育としての日本語教育の見解を紹介し、筆者が若干の説明を加えたものである。また歴史とエスニック・グループ、言語及び言語環境には触れておく。なぜならばそれはマクロ的立場にたって理論を構築するためにはこれらの考え方が必要だからである。

台湾は今から5000年前（先史時代）に狩猟を中心とした社会から、農耕社会が成立し、青銅器も作られるようになった。この地で生活していた人々は現在の先住民族（原住民）の祖先といえよう。しかしここから1600年前後までは空白の時代となっている。

つまり歴史の記述がないのである。1600年から62年間は、国際競争の時期で日本人や漢民族の往来も盛んで、オランダやスペインもこの時期に占領した。その時期を境に漢民族が移民として台湾に入って来て、清領時代に本格化される。1662年から1683年までは鄭氏政権の時期となり、1683年から1895年までは清領時代となり、1895年から1945年までは日本統治時代となり、1945年以降は中華民国に接收され、現在に至っている。簡単にいってしまえば、歴史的にも外来政権によって形成された社会といえよう。この島に住む住民も先住民族（原住民）と漢民族に分けられる。構成は意外と複雑で先住民族（原住民）は人口比の1.7%となっており、漢民族は9

8. 3%の人口比となっている。その中にも先住民族系⁽⁵⁾は生蕃と熟蕃に分かれ、漢民族系⁽⁶⁾は閩南人と客家人、そして大陸各省籍の外省人となっている。

台湾は多言語社会である。先住民族（原住民）の言語⁽⁷⁾はたくさんの言語が存在しているといわれているが、消滅してしまったものもある。漢民族では閩南人の人達の方言⁽⁸⁾、客家人の人達の方言⁽⁹⁾がそれぞれある。また大陸各省籍の外省人の人達の方言⁽¹⁰⁾はさまざまである。そして残存日本語⁽¹¹⁾を話す人達もいる。しかし現状では国語（北京語を基調としたもの）が中心の社会になっている。

変種からいうと国語はH変種⁽¹²⁾となり、その他の方言や残存日本語はL変種⁽¹³⁾ということになる。国語プラス方言、また若い世代は国語だけという社会になっている。どの世代でも国語の中で日本語や台湾語や先住民諸語を用いて話すことも最近の現象としてあるようである。

(14)

ここからは戦後台湾における日本語教育がどのように提唱されてきたかを見ていくこととする。台湾の日本語教育は領台時代から始まるが、詳しくは台湾における領台時代の教育史や教授法をまとめた蔡茂豊氏の『中国人に対する日本語教育の史的研究』を参照されたい。しかしこれは筑波大学への学位（博士）請求論文であり、この頃は政治的にも当局が煩かったために、このようなテーマにしたのである。現在は『台湾における日本語教育の史的研究』となっている。ここで述べることは1945年以降の国民党政権下の日本語教育ということになる。勿論、国民党政権下では日本語使用は御法度であった。まずは光復節以降の日本語教育の展開と台湾の人々に対する日本語教育のあり方を紹介していくことにする。

光復節以降の日本語教育の展開

蔡茂豊氏は光復節以降の日本語教育の位置づけを以下のように提示している⁽¹⁵⁾。

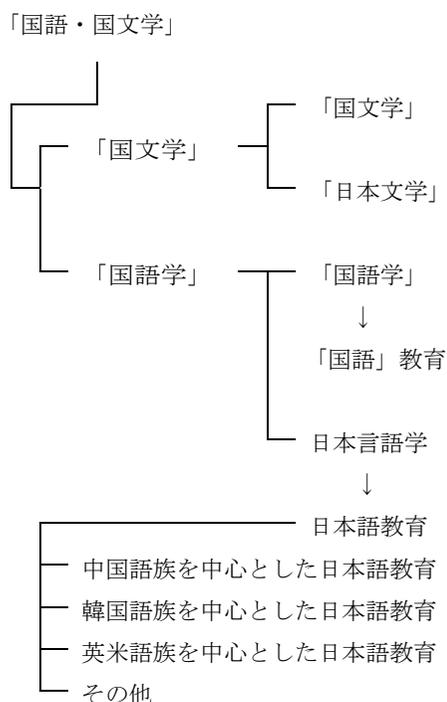
- ①日本語教育の過渡期（1945～1948）
- ②日本語教育の圧迫期（1948～1963）
- ③日本語教育の転換期（1963～1980）
- ④日本語教育の開放期（1980～1988）
- ⑤日本語教育の飛躍期（1988～ ）

つまり光復節以降の日本語教育は時代の要請によって、また日本との民間交流での必要性から徐々にその専門家育成のために開放され発展していったものといえよう。

台湾の人々に対する日本語教育のあり方

ここでは蔡茂豊氏の理論と実践の融合という観点から、台湾の人々に対する日本語教育がどのようなおこなわれているかを紹介する。

蔡茂豊氏が提唱している語族別日本語教育を下記に提示する⁽¹⁶⁾。



台湾の人々に対する日本語教育のあり方（語族別日本語教育）の提示をした。この考え方をもう少し詳しく述べていく。（また『東呉日本語教育』の創刊号の刊行の辞に「中国人に対する日本語教育について」、蔡茂豊氏が発表している。それらを参考にしながら述べるものである。）マクロ社会言語学的な観点から、台湾は言語政策によって国語がH変種で使用されるようになった。L変種は周辺に追いやられた言語ということになる。

人々は光復によって、祖国の言語を習得していった。（中国語教育のはじまりである。）語族別日本語教育というのは、中国語を共通語としている人（台湾の人々の場合は政策上で決められた言語となった。）、或いは韓国語を共通語としている人、或いは英米語を共通語としている人が日本語を習得する時、共通語を媒介語として使用し、習得していく方法である。

なぜ、このような考えが生まれたのであろうか。少し日本でおこなわれている日本語教育の実態を説明すれば、外国人を一つの教室に集めて、日本語を使用して日本語を教えているのが現状である。一般的ではあるが、教え方によってはマイナスイメージも大きい。

例えば、中国や台湾の中華系の人達は、ローマ字で理解するのが苦手であるし、欧米系はローマ字で理解するのが普通である。このような言語の差異から語族別を提唱したのである。また同国の人達が（ここでは台湾の人々だけを指す。）同じ教室で、共通語である国語を用いて授業をすれば、理解できることは間違いのないであろう。ただし、共通語に頼りすぎて言語習得がスムーズにいくかどうか

疑問の部分もある。教授法の立場から考えれば、外国語習得は直接法に頼る傾向がある。

しかし海外で教える場合には、やはり媒介語として共通語を使用して習得させた方が、早いのではないか。教える教師側も外国語に精通していないとだめだということになる。

つまり蔡茂豊氏は30年前から、語族別日本語教育を提唱し、日本語教師は外国語を使って習得させていかなければならないことを説いている。では日本の日本語教師の養成はどうなっているのだろう。基本的には大学では国文学や国語学の学科が国際化の対応によって、日本文学及び日本語学に変わっただけのことなのである。最近になってようやく外国語学との対照的な研究をするようになったが、教師になる人達も日本語は直接法で教えるものという考えがあり、外国語を使って授業をするという教師はごく少数にすぎない。むしろ海外での日本語教育や日本語学の研究は日本よりも研究がなされているような感じさえ受ける。特に隣国である台湾の日本語教育及び日本語学の研究は盛んで、台湾独自の日本語教育研究を展開している。蔡茂豊氏の提唱したその理論は主軸となり、この観点から日本語教育の理論が実践されている。またこの理論を実践しながら、新たな方向にむかっていることは事実である。台湾の日本語教育は言語教育の一部分として独自のその地域の風土と共通語及び地域言語の多元的パラダイムの中で成長している。

(17)

ここではその理論的な部分を客観的に分析し、新たな見解を述べた地域別日本語教育学（台湾日本語教育学）を紹介したい。この理論を提唱しているのは頼錦雀氏である。蔡茂豊氏の弟子にあたり、筆者の先輩でもある。

どのようにしてこの理論が生まれたのであろうか。これは頼錦雀氏がシンガポール大学や拓殖大学での教学経験からである。頼氏の発表した論文の中から蔡茂豊氏の理論との比較、理論確立のための関連学問、理論の研究範囲等いくつか見ていくこととする。

頼氏は蔡氏の考え方を比較している。どのようなことかといえば、語族別の共通語（中国語）に対する認識には賛成するが、中国大陸の中国語⁽¹⁸⁾と比較した時、単語や文法及び文字のレベルで差異があるということを強調している。

またシンガポールでの経験から多民族国家における日本語教学は華人が75%を占めているけれども、中国語では教えられないとっている。つまり公用語が問題なのである。

台湾日本語教育学の確立にどのような関連学問が必要であろうか。というところには日本語学、応用言語学、語用論、中間言語などをあげている。つまり頼氏も言語学を主軸とした日本語教育への応用を考えていることがわかる。勿論、言語教育にはいろいろと心理学や認知理論が最近の主流であるが、台湾では言語を主軸にされるべきであることを強調している。

頼氏の地域別日本語教育学（台湾日本語教育学）の研究及び内訳について下記に提示する⁽¹⁹⁾。

- ①台湾日本語教育学の見地からの日本語学研究
- ②台湾日本語学習者の言語生活研究
- ③台湾日本語学習者の生活言語研究
- ④日本語と台湾日本語学習者の生活言語との対照研究

- ⑤日本事情と台湾事情との対照研究
- ⑥台湾日本語学習者における中間言語研究
- ⑦台湾日本語教育における指導方策の研究
- ⑧台湾日本語教育の教材研究と開発
- ⑨日中辞典・中日辞典編纂法の研究と開発
- ⑩台湾日本語教育における評価法の研究と開発
- ⑪台湾日本語教師養成法についての研究
- ⑫台湾日本語教育実習の研究
- ⑬台湾日本語教育の実態的研究
- ⑭台湾日本語教育の史的 research

頼氏が提唱した理論や関連学問及び理論の研究範囲を紹介した。蔡茂豊氏の理論と頼錦雀氏の理論は共にマクロ的な学問範囲で日本語教育を述べている。またこれらの理論が主軸となって台湾の日本語教育が支えられているのである。勿論、日本人である筆者にとっても影響された考え方である。

上述したようにマクロ的な学問範囲であるといえるだろう。ここで筆者は台湾で日本語を教えていた経験からいくつか自分の考え方を述べてみたい。この考え方はマクロ的な部分とミクロ的な部分を融合させたものといえよう。まず社会言語学の学問分野で地域言語の研究がおこなわれている。この地域言語の採集方法を基礎に、その土地がどのような言語環境で、どのような言語が実際に使用されているのかということ調査し、風土やその土地にあった教え方をするということである。

共通語である（H変種）で教えるか、共通語以外の地域語及び少数言語（L変種）で教えるか、どちらかである。ここで日本人の日本語教師を例として考えてみたいが、例えば、日本人で台湾の台北で日本語を教えている人は、大部分は直接法で教えているであろうが、媒介語を用いなければ教えられないという時、国語でようはたりははずである。また教える対象（年齢層）にもよるが基本的な言語環境は国語なので問題はない。つまりH変種を応用して実践していく方法。もう一つは台北以外の地域（中部及び南部そして東部など地方といわれる場所である。）では国語の普及はしているものの、実際の生活ではL変種を使用している地域でもある。そのような地域で日本人の日本語教師はどうしたらいいのか、教える対象（年齢層）と地域性によるが、教師は共通語は勿論のこと、地域語についても少し認識が必要となつてこよう。二通りの方法が必要である。

つまりこのように異文化に直面しても、それほどのことを問題に感じない日本人の日本語教師を養成していかなければならないということと、筆者の考える日本語教育（地域密接型日本語教育⁽²⁰⁾）の方法で日本人教師は授業をしなければならぬとすると、教師養成にはかなりの時間を要してしまうことになる。また物理的にはその地域の言語（共通語）は勉強できても、地域語や少数言語は習得しにくい。筆者の考える日本語教育（地域密接型日本語教育）は、問題点もあるが、やがてそのような教師が育つであろうと思われる。なぜかといえば、海外の日本語教育の現場で必要とされている教師は、その地域の言語や文化を理解し、日本語学の知識と日本語教育の知識を備えた人でなければな

らないからである。しかしこの考え方は実践に移すまでには時間がかかりそうであるし、この理論構築には（ここでは敢えて台湾地域に限り）言語調査が必要とされる。

- (1) 本稿は2001年12月23日、第108回中国語文学会定例学術研究会において発表した内容の原稿に加筆、訂正を加えたものである。
- (2) 言語帝国主義とは植民地に対する宗主国語の押しつけ及び宗主国内の地方言語の圧迫も含む。詳しくは（三浦信孝・粕谷啓介編（2000）『言語帝国主義とは何か』藤原書店）を参照されたい。
- (3) 日本が敗戦し、台湾は中華民国に接收された。そこでかつての国語（日本語）は言語帝国主義の色合いを少しずつ薄くし、今度は北京語を基調とした言語が教育を通して浸透させる政策がなされていったのである。
- (4) ここでいう超民族的機能とは、日本語（戦前の国語教育）は代用言語として使用されていた。また現状では中国語（戦後の国語教育）が代用言語として使用されている状況であり、ある種の勢力拡大の要素をもった言語なのである。
- (5) 先住民族系は生蕃と熟蕃とに分けられる。生蕃はタイヤル族、サイシャット族・ツォウ族・ブヌン族・ルカイ族・パイワン族・アミ族・ピュマ族・ヤミ族である。熟蕃はケタガラン族・ルイラン族・カバラン族・タオカス族・パゼツペ族・パボラ族・シラヤ族・ホアニア族である。
- (6) 漢民族系は閩南人及び客家人となっている。このグループの人達は本省人と呼ばれる層であり、1945年以降に台湾に入ってきた人達の層を外省人という。
- (7) 台湾の先住民族の言語は高砂族諸語という。オーストロネシア語族に属する言語で、ダイエン及び土田滋両氏の意見によれば、南島語族の西部語派に属し、フィリピンの諸言語に近い言葉である。
- (8) 閩南人の人達の方言は閩語を話す一つのグループである。その言語体系は下位分類すると五種になる。台湾の人達の話す方言は東南沿海部地域の方言でこの地域はさらに三つの支系に分けられる。
- (9) 客家人の人達の方言はもともと広東省東部の梅県を中心に話されていた言語なのである。台湾では新竹、苗栗、屏東にまとまった集落があり、客家語が使用されている。
- (10) 1945年以降に中国大陆から台湾に入ってきた人達の層を外省人と呼ぶが、彼らの言語については中国大陆全域にわたる方言が話されており、とくに浙江省や江蘇省の方言が多いようである。
- (11) 残存日本語を話す人達の層は少数派の本省人と先住民族の一部である。つまり超民族的機能をもった言語として、ある意味で定着してきたのである。
- (12) H変種とはダイグロシヤ (diglossia) つまりその社会で二つの言語の使用が機能的に区別されている状況のことを指す。H変種 (high,H) 言語であり、上位の言語という位置づけのことである。
- (13) L変種とは上記と同じ状況の中で、L変種 (low,L) 言語であり、下位の言語の位置づけのことである。
- (14) 蔡茂豊氏は戦後の台湾における日本語教育の第一人者であり、専門分野は植民地時代の日本語教育及び日本語学とその研究の幅も広い。そして日本語教師の養成にも力を入れており、世界的にも有名な日本語学者である。
- (15) 蔡茂豊氏の『台湾における日本語教育の史的研究』東呉大学日本文化研究所、PP.1~2を引用したものである。

- (16) 蔡茂豊氏の「中国人に対する日本語教育について」『東呉日本語教育』創刊号 東呉大学東方語文学会、P.5を引用したものである。
- (17) 頼錦雀氏は蔡茂豊氏の教え子であり、弟子筋にあたる。現在、東呉大学日本語学科の主任教授である。専門は日本語学及び日本語教育と多面的な研究をされている。
- (18) 大陸で使用されている中国語とは、基本的には「普通話」である。北方方言を基調として、中国語が形成されている。しかし二つの中国が存在する以上、台湾は台湾の中国語を確立しなければならない時期にきているのである。純粋な言語レベルで考えた場合、やはり文字、語彙、文法の部分でかなりの差異がある。社会言語学的なレベルで研究されなければならない分野である。
- (19) 頼錦雀氏の「地域別日本語教育への提言—台湾日本語教育学を例として—」『第二屆第四次論文發表會論文集』中華民國日語教育學會P.216を引用したものである。
- (20) 地域密接型日本語教育は筆者も模索中であるが、地域社会とその土地の言語環境、そして風土にあった言語教育の実践を試み、新たな視点で日本語教育を構築していくことを考えているのである。それには言語的な調査が必要とされ、今後の課題でもある。
- (1) 蔡 茂豊 (1976年) 「中国人に対する日本語教育について」『東呉日本語教育』創刊号, 東呉大学東方語文学会
- (2) 蔡 茂豊 (1989年) 『台湾における日本語教育の史的研究』東呉大学日本文化研究所
- (3) 鍾 芳珍 (1995年) 『台湾における各種別日本語教育の研究』東呉大学日本語文学系・博士論文
- (4) 頼 錦雀 (1996年) 「地域別日本語教育への提言—台湾日本語教育学を例として—」『第二屆第四次論文發表會論文集』中華民國日語教育學會
- (5) 林 長河 (1997年) 『台湾におけるコース・デザインの実証的研究』東呉大学日本語文学系・博士論文
- (6) ブリギッテ・シュリーベン＝ランゲ／原 聖・粕谷啓介・李守 (訳) (1996年) 『【新版】社会言語学の方法』三元社

